空隙の編 ― あたたかい場所をもういちど ―

糟谷 麻紘（京都工芸繊維大学大学院）

計画地は広島県福山市鞆の浦。瀬戸内海のほぼ中央に位置し、「潮待ちの港」として、歴史と文化をつみかさねてきた。それゆえ鞆の「道」は、応接・商業・生活の場として、相互貫入しながら重要な役割を果たしてきた。しかし時代の推移により、近世港町の姿と新たな住宅が混在していき、御船を自動車と共用のオープンスペースとして活用することが困難となってきた。町並みの価値を維持するため、江戸時代から昭和戦前までの伝統的建造物は外観の復元的修理が始まっているが、その他の建物は廃墟化し空地になっていく現実。そして石垣崩壊の危険による鞆城跡周辺の空洞化の問題はこれからも続く。場所の拠点となる「建築」と町のインフラとしての「道」に新しいレイヤー（価値）を重ね、鞆の道が持っていた路地的魅力と住人の日々の生活の基盤となる場の創出を同時に計画する。調査は鞆地区全域で行い、相互に影響し合う計画地を3箇所選定した。裏として扱われる道や空地に着目し、各々の抱える問題に合わせて新たな流れを作り、町全体を繋いでいく。この流れが次第に周囲へと広がり、町全体が影響し合いながら新たな日常が生まれることを望んでいる。

SITE SURVEY

鞆の浦（広島県福山市鞆区）

沼隈半島南端にある港湾およびその周辺海域。沿岸部と沖の島々一帯は国の名勝及び国立公園に指定。

歴史的価値

潮の分かれ路、古くから鞆の浦は文化の中継地であった。その歴史も古く、数多くの史跡や文化財にめぐまれている。

―大伴旅人の詩

―鎌倉時代安国寺や鞆の寺社

―南北朝時代の大可島城跡

―足利氏関係の遺跡

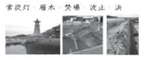
―鞆城の築城（毛利氏）

「埋め立て　架橋計画」

幅の狭い道路による交通トラブルや地域活性化を目的に港の海岸を埋め立て、橋をかける計画。夢舞台横浜と交通重視派と鞆の住人の間でもニ分してしまっている

知事に埋め立て免許の交付をしないよう申した利決が広島地裁で言い渡された。

江戸期の港湾の姿



鞆を支える生業

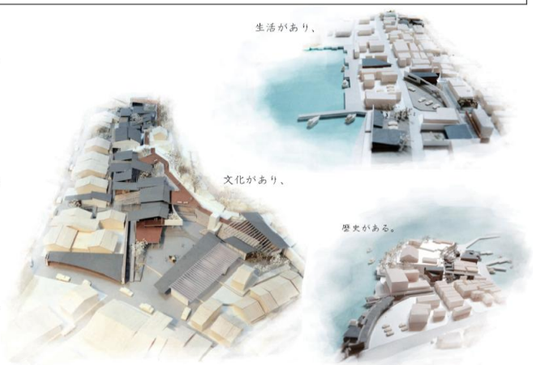
鞆のエントランス

鞆城跡　周辺

鞆港　フェリー乗り場

地理的特徴

鞆の七島―古代では七つの島々から構成されていたが、時代の流れとともに、埋機埋立が繰り返され、現在の陸地の外形となっている。島の名残としての五が今も残っている。



潮待ちの港として知られる鞆は
おもてなしの町
みちは商売の場であり出違いの場である

張り巡らされた小路は生活の延長
溢れ出た鞆の生活感
空地はリビングルームに変化する

古くから変わらない道幅
モータリゼーションや時代の変化とともに
不便さを感じざるを得ない

エントランス
車から徒歩・自転車へと切り替える
町の奥へと引き込む

鞆城跡
新たな道をつくり人の流れを分散
裏の場所を表の場所に

鞆港
町並み　生業　人との距離感
ほどよく保つ

PROPORSAL

過去を取り戻すのではなく、過去に学びながら
新しいみちと場所をつくる。

＜PROBREM＞

塀によって人々の間で生じたギャップ
人口流出や空地化、低未利用住戸の増加は
まちのつながりや魅力をより希薄にさせていく。

鞆の場所性、こころのよりどころとなる場所が
まちの持つネガティブな要素に埋没しつつある。

↓

＜PROPRSAL＞

建築とインフラの視点から、道の在り方を再定義し、
新たに道をつくる。もしくは道の価値を高めることで、
その場その場に適したアクションを誘発する。

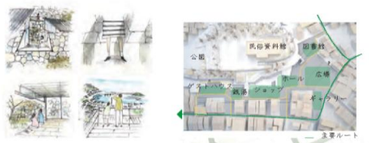
空地化や低未利用住戸が密集している主要な場所や
安全性が脅かされている場所を種種的に活用し、
安心して歩ける心の拠り所となる場をつくりたす。

それぞれの敷地のもつ特性を生かしながら、建築とインフラの関わり方を考える

TOMO CASTLE SITE

人と車が最も集中して
渋滞を引き起こす
↓
新たな道を導入し
人の流れを分散させる

危険斜地及崩壊地区指定による
空地増加
↓
建築的に安全性を高め
景観から人のつどう場所へ



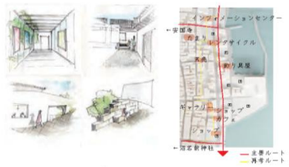
TOMO ENTRANCE

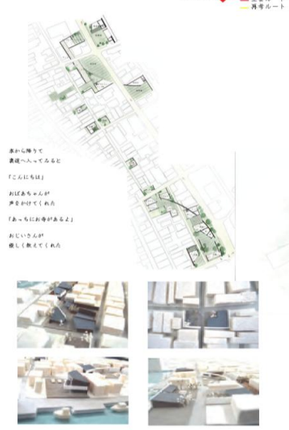
車の流入を鞆のエントランス部分で減らすための
車から徒歩に切り替えるジャンクション的な場所

鞆の浦の中心部に至る唯一の幹道

車から徒歩に　切り替える道

天満など港町の風情の残る道
寺を巡る巡礼ルート





TOMO HARBOR

人と自然の融合した景観的に最も美しさを放す場所

荒廃した建物や漁業関係の会社の撤退により近づきづらい場所
主要な道路外の道は昔の路地的風情を残しつつも安全が担保

↓

道によって異なる目的をもつ人々をほどよい距離感に保つ

第9回「街並みの美学トラベルスカラシップ」応募　研究旅行計画

糟谷 麻紘（京都工芸繊維大学大学院）

研究テーマ　～卒業設計で取り組んだ課題とその先につなげていく研究課題～

1. 卒業設計で見つけた「街並みの課題」と「検討した提案」

卒業設計では、瀬戸内海の港町「鞆の浦」を舞台に選びました。鞆の浦の生活の拠点となる「建築」と町のインフラとしての「道」に新しい価値を重ね、鞆の道が持っていた路地的魅力と住人の日々の生活の基盤となる場の創出を同時に計画しました。鞆の浦は、瀬戸内海のほぼ中央に位置し、「潮待ちの港」として、歴史と文化をつみかさねてきました。それゆえ鞆の浦の「道」は、生活の場であると共に、商業・接待の機能を併せ持ち、それぞれの機能が相互貫入しながら重要な役割を果たしてきたと理解できます。しかしながら、時代の推移により、近世港町の姿と新たな住宅が混在し、更に「道」は自動車に占有されるに従い、本来の姿がネガティブな要素に埋没しつつあります。この社会問題を解決するために提案された埋め立てと架橋計画に、町は一時期大きく揺れて、意見の対立も生み出したようですが、2年ほど前に開発の中止が決定され、現在にいたっています。

現在、町並みの価値を維持するため、江戸時代から昭和戦前までの伝統的建造物は、外観の復元的修理が始まっていますが、一方で、その他の建物は廃墟化し空地になっている現実。そして石垣崩壊の危険による鞆城跡周辺の空洞化の問題は、街並みの雰囲気にも少なからず悪影響を与えています。

2. 街並みをとおして考えるテーマ「港町における景観と人々の暮らしの関係」

芦原義信氏の『街並みの美学』に多く登場する西洋の街並みと日本の街並みの形成方法の違いの一番の例として、街並みにおける「図」と「地」ののが挙げられます。鞆の浦の密集した路地が本来もつ「図」として内的秩序的な役割は、貴重に登場する西洋の街並みがもつ役割に近いと思います。現在でも入り組んだ路地の先や空地にはリビングや廊下の延長のように、椅子や机などの溢れ出しが見られ、多くの住人がそこでそれぞれの時間を過ごします。そのような風景が、いつまでも維持され続けている西洋の街並みと、対してそのような風景が消えつつある日本の街並みの違いはどの時点で生まれたのか。常に疑問に思ってきました。

歴史的な役割を果たした瀬戸内海の港町を題材として、日本における「道」の役割を理解するとともに、現代社会での課題を読み取り、解決策の提案を卒業設計にて試みました。その経験をふまえて今回、海外の港町を歴史・文化・社会の側面から比較調査対象とすることにより、国内での研究だけでは気づかない解決策を見いだせるのではないかと考えています。日本史の舞台の中での存在価値は認められつつも、地形的な効果をきちんと理解した上で、日本の港町における町並み景観の活性化とその活動の意味を見つけだし、よりステップアップした研究テーマを見つけることが目的です。

3. 研究調査場所と調査期間

瀬戸内海地域と気候的に類似性のある地中海沿岸を比較研究候補とします。その中で特に、鞆の浦の景観と共通点がある港町をクロアチア共和国イストラ半島にある港町（プーラ、ロヴィニ、ポレッチ）に見出しました。現地調査にあたっては、当地の歴史的な位置づけとともに、地形的な観点からも考察できるように、事前準備をします。また、卒業設計時にも行ったように、短期ではなく2日以上の長期の滞在をすることで、その街が持つ様々な側面を見ることを考えています。

鞆の浦全景

空地の集合場

井戸端会議場

湾に向かって建つ民家

細い道を譲り合いですれ違う車

調査対象敷地のイストラ半島

旅行計画

1. 調査対象敷地へのアクセス方法

日本より空路ヴェニスに入り、海路クロアチア共和国
イストラ半島の港町に入るルートを検討中です。

2. 調査都市と調査場所

・プーラ（クロアチア語:Pula）

クロアチア・イストラ郡最大の都市。古代ローマ時代からの行政中心地で、ワイン醸造、漁業、造船業、観光業の長い伝統を持つ。欧州強国間の領土奪取の歴史の中で、古代と現代、地中海と中央ヨーロッパの文化が混じり合う地となり、多様な歴史文化の街並みが形成されようです。

プーラ航空写真

ローマ時代のコロッセオ

プーラ市街全景

・ロヴィニ（クロアチア語:Rovinj）

イストリア半島西岸に位置する漁港。旧市街地の半島はかつて本土から海峡でへだてられていた島だったが、1763年、海峡は埋め立てられたようです。坂と路地の多い瀬戸内海の尾道の町並みとの比較を期待しています。

ロヴィニ航空写真

漁港全景

入り組んだ路地

・ポレッチ（クロアチア語:Porec）

小さな島と小さな半島によって外海から囲われた形で港が守られている地形が興味を湧かせます。約2000年の歴史をもち、古代ローマ帝国時代の軍事拠点建造物やエウフラシウス聖堂建築群の調査も大変興味深いです。

ポレッチ航空写真

エウフラシウス聖堂

日本では見かけない町屋形式

注：鞆の浦写真のみ本人撮影

卒業設計のタイトルと概要

タイトル：「空隙の編―あたたかい場所をもういちど―」
概要：道とともにある建築の在り方を、その土地との関係性と共に考えます。敷地は広島県福山市にある鞆の浦です。本来この港町のもつあたたかみのある場所、歴史、文化が、近代化によって生まれたネガティブな要素に埋没しつつあります。そこで生活や観光等、様々な視点から、道のまち・鞆の浦の新たな在り方を提案します。

研究旅行のテーマと訪問予定の国（都市）

テーマ：港町における景観と人々の暮らしの関係
訪問予定の都市は、クロアチア共和国イストラ半島にある港町（プーラ、ロヴィニ、ポレッチ）です。歴史的価値と現在の人々の暮らしの共生の良い例として調査し、日本の港町のこれからを考えます。

009　糟谷　麻紘

京都工芸繊維大学　大学院　建築学専攻